支援くんの火災予防奮闘記

～火災を起こさないために～

Vol.4

「ちえん（支援）飛行機ににょりたくないか？」

唐突（とうとつ）（意：不意に）に援姫様からそう聞かれて

「飛行機・・・でござるか？　乗れるものなら一度は乗ってみたいものですが、拙者はこのお屋敷の火災の守りを任されておりますれば・・残念でござりまするが。」とお答え申しあげましたところ

「にょりたいか、そうか、にょりたいのじゃな。」と、ひとりごち（ひとりごと）ながらお屋敷の中へと戻ってゆかれました。

姫様がひとりごちられる時は碌（ろく）なこと（意：まっとうではない）をお考えでないのですが・・・今回ばかりは事情がちごうておりまする。

実は先日、テレビで『仮面の忍者赤影』を見た姫様が番小屋で釜風呂の薪割をしておったご助を見つけ、「ぼすけ、辰巳の用水のお魚を上から見たくにゃいか？」とお聞きなされたことがございました。

ご助は即座に「見たくはありませぬ！」とつれなく返答いたしたのじゃが姫様は引き下がらず「見たくにゃいのか！」「見たいじゃろぅ！」と、更に四たびに渡りてお聞きなされ、根負けしたご助が「なんとのう見たくなりもうした。」とお答えしたところ、嬉々（きき）（意：喜んで）としてお屋敷に入られ、戻ってこられたときには、その手には富山の売薬さんからもらったゴム風船が握られておりもうした。

ヘリウムガスを充填（じゅうてん）（意：詰めた）した赤いゴム風船の下にはセロテープで付けた凧（たこ）ひもが１本垂れ下がっており、「さあ、持てぼすけ」と姫様のお言葉に、ぼすけ、いや、ご助は魅入られたように凧ひもを掴みましてござる。

次の瞬間、姫様が「赤影ちゃんちょうぉッ（参上）」と風船を虚空へと投げ上げますれば「あー、あー、あー」との悲鳴を残し、ご助の姿は青い空の彼方へと消えたのでござるよ。

あとには「ぼすけ、ぼすけぇー、ぼすけはどこにいったにょ？」とご助を探す姫様の悲しいお声だけが響いてござった。

哀れご助、姫様のお手に掛かってしもうたか・・」拙者は突然のご助との別れに戦国の世の無常を感じ、ご助が消えていった向山（卯辰山の別名）の方向へと手を合わせたものでござる。

三日が経ち、もう相まみえることも出来ぬと諦めておりましたところ、その夜半（意：真夜中）に小さな葛籠（意：かご）を掲げたご助が帰ってまいりましてござる。

「ご、ご助！無事であったか？」気遣う拙者にご助は酔漢（意：よっぱらい）の体で

「た、楽しかったですよぉ、旦那様。実はですな、お屋敷のお庭に実った稗を時々施しておりました雀がおりましてな。その雀が助けてくれ、今日まで雀のお宿で、孔雀様から下にも置かないもてなしを受けておりました。ああ、いに

しえのヘルスセンターもかくあらん！ああ楽しゅうございましたぁ！」と答えるではありませんか。

「むむ、拙者がどれほど心配しておったかも知らずに！お屋敷の大切なお勤めを忘れたかっ！」と叱れば

「滅相もございませぬ。今朝がた勘定を求められて三日で一両二分（12 万円か？）。酔いも醒めますがね。」

「ははは、一両二分は痛いの。」

「へい、それでこの葛籠でございます。」とご助が葛籠を差し出してきましてな、それを一瞥（いちべつ）（意：チラ見）し、

「なんじゃ？昔話の舌切雀じゃろうが？なに？拙者への土産とな？勿論小さい方じゃろうな？」

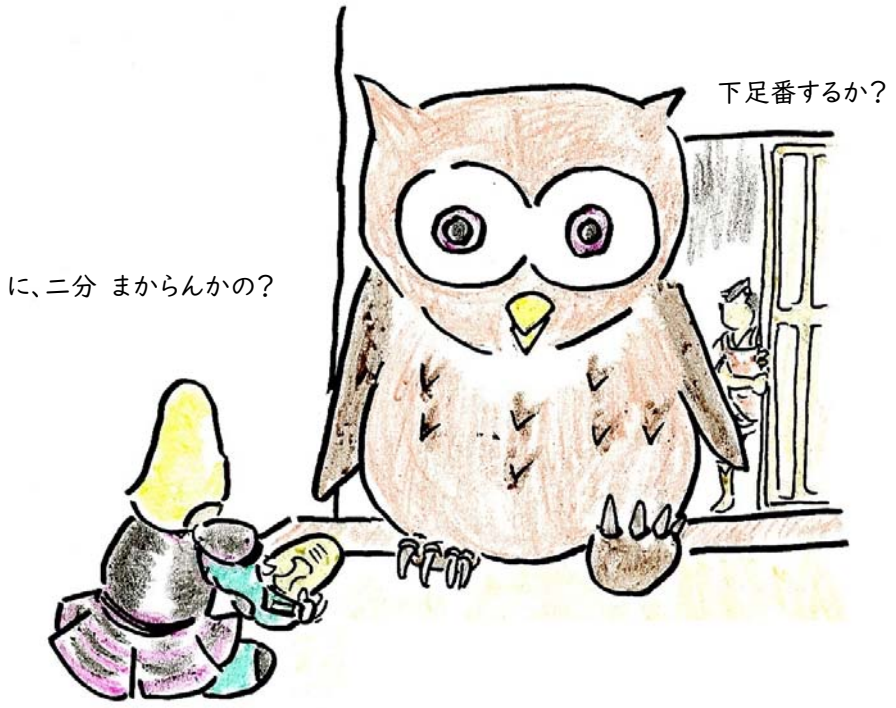
「はい。こころばかりの品だと雀めが申しますのでお収めを」ふむふむ、拙者に土産とは、ご助にしては上出来。

「おお、それは忝(かたじけな)い。有難く頂戴いたそう。」と受け取り中を見れば・・・

「ご助、なんじゃこの支援様と書かれた請求書は？」と聞くが早いかご助は番小屋を飛び出すと「さ、ささっ、フクロウ様、旦那様がお支払い下さりまする。」と叫んでおりもうした。

払わねば雀の宿で下足番じゃと脅され、借金の肩代わりをする羽目になったのでござるよ。

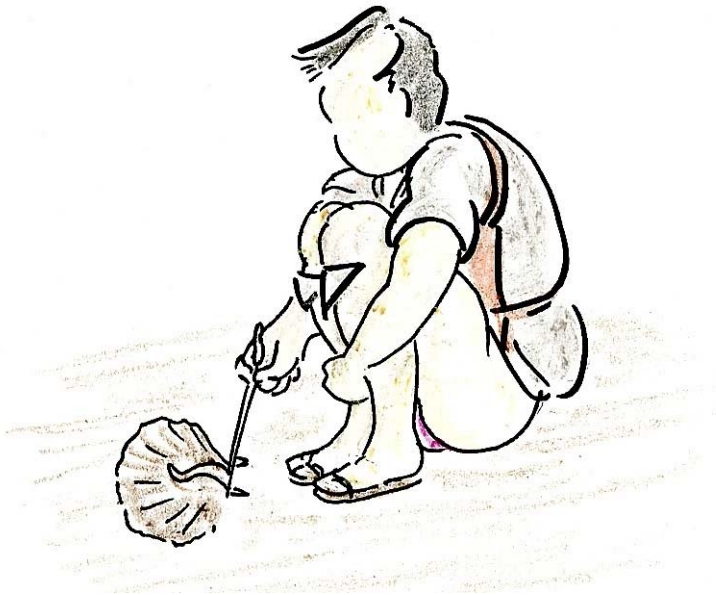
古人(いにしえびと)は不苦労（ふくろう＝苦労無し）とか言いますが、拙者には負苦労（苦労を負わせる）でござった。



一両二分を支払い、領収書と会員証をフクロウから貰い受けながら、それもこれも元を正せば姫様の悪戯(いたずら)から生じたる出来事とその日の日誌にしたためましてござる。

それから数日経ち、姫様もご助の帰還を喜んでおいででしたが、何故か当のご助がお勤めに身が入らない様子。好物の甘酒にも興味をしめさず、ホーッと溜息をつきながら

「孔雀様にもう一目逢いたいのう・・逢いたいのう孔雀様に。」と独り言をゆうてござった。



「痴(し)れ者(もの)（意：馬鹿者）め！己が勤めを忘れたか！」と一喝、二喝、三喝・・・十喝を超える喝をくれることと相成りまして候。

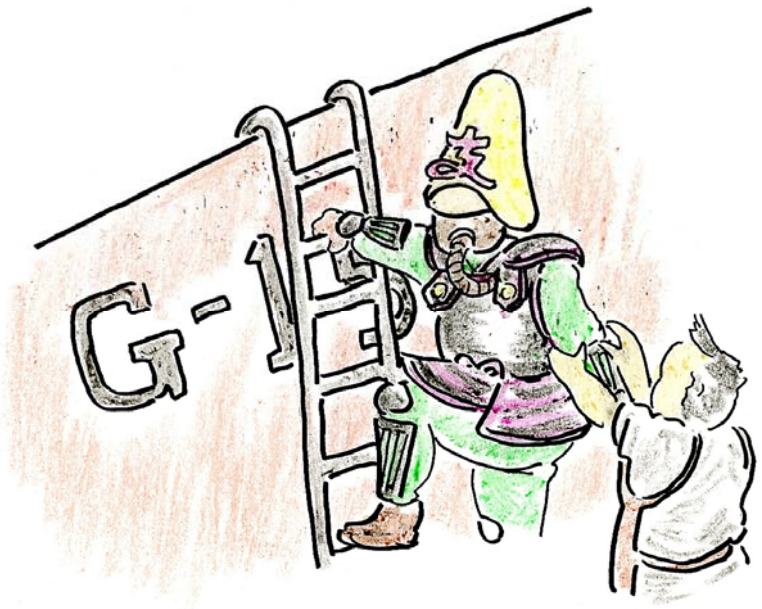
そんなときでござった。姫様が拙者に飛行機の話をなされましたのは。

先に申し上げておきまするが、拙者は純粋に飛行機なるものに乗ってみたいと思ったまでで、ご助の話、特に孔雀様に逢いたいという助平心から乗ってみたいと申し上げたのではござりませぬぞ。

そして四半刻後、屋敷から戻られた姫様の手には、我らが殿様が市中の人々の為にと、お考え下された市民共済の頑丈な（？）チラシで作られた紙飛行機が。
「こ、これで・・飛ぶのですかな？」恐るおそるお聞きしたところ
「そうぢゃ。一人乗りのＧＩ５じゃ。」と姫様。
「Ｇ、ＧＩ５？・・とは？」さらに恐るおそるお聞きすれば
「ちゅごいじゃろ？わらわが、ちえいたい（自衛隊）のＦＩ５より速くとぶように折ったのじゃ。「ちゅごすぎでござるよ。」と拙者がこたえる傍らから
「だ、旦那様。旦那様を危ない目に遭わせる訳にはまいりませぬ。私が乗りまする。」とご助。
「むむむっ！」拙者にはご助の考えが手に取るように分かり申した。

「それには及ばぬ。拙者も武士の端くれ、怖がって乗らぬは末代までの恥じゃ。」

と縋(すが)るご助を振り払いながら機上のもののふ（武士）となったのでござる。



「姫様。操縦桿は？」とお聞きすると。

「これじゃ。」と機首から伸びた凧ひもを握らされましてござる。

「用意はよいか？どっちにとびたい？」と聞かれた拙者は

「む、向山へ、そうじゃなご助？」とご助を探し候らえども、え見えず（古典：見えない）。

「向山ちゃな、あっちぢゃちえん。わらわがちゅくった、リカちゃんの家がみえるろ？あの上を飛べば向山まで真っすぐぢゃ。」

「しょ、承知つかまって候。いざ、姫様お頼み申しあげまする。」

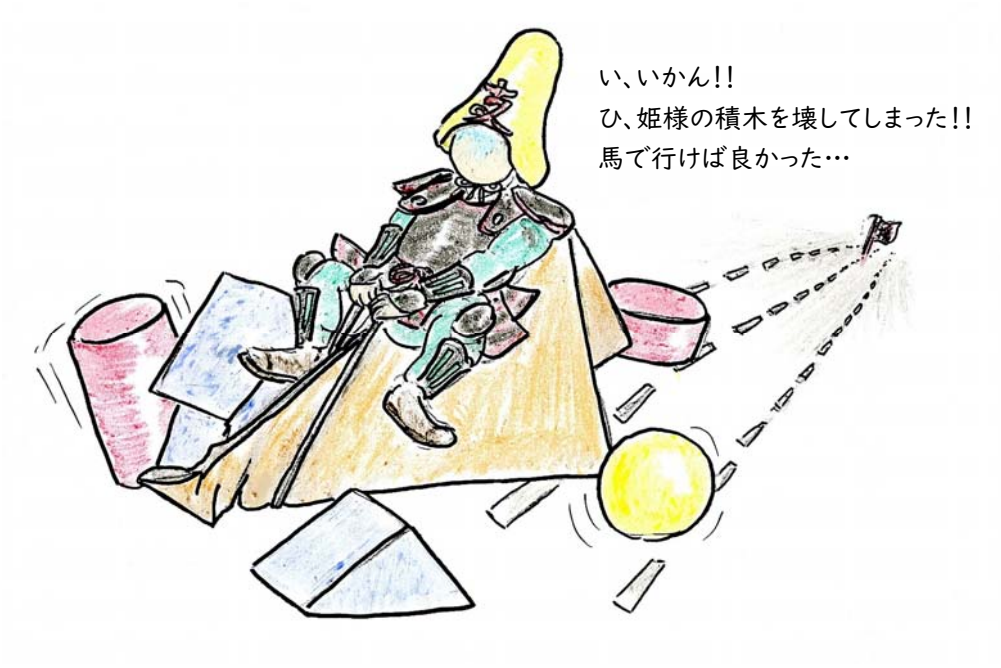
「えいっ」と姫様の掛け声とともに拙者の乗ったＧＩ５は向山目掛け飛行を開始したのでござる。

　お屋敷が瞬く間に眼下で小さくなるのを眺めながら、知らず知らず拙者は「孔雀殿今まいりまするぞぉ！」と叫んでおりもうした。

「孔雀様ぁ今まいりますぅ！」と少し遅れ、また少し異なるコダマを聴いたような気がした刹那（意：その時）ＧＩ５が失速し、機首を下げ始めたのでござる。

「な、何事か？！」と足下（意：あしもと）をみれば、隠れて乗り込んだご助の姿が。

「ば、馬鹿者！何をしておる？一人乗りじゃぞ！」と叱ってはみたものの後の祭り。墜落したＧＩ５はリカちゃんハウスを直撃したのでござる。



「旦那様。お許し下さい、もう一目孔雀様にお逢いしたくて・・・」

「・・・ふぁははは。」拙者は吹き出したのでござる。

「旦那様？」気がふれたのではと不安げに拙者をみるご助に

「笑うしかないではないか、のうご助。拙者らは市民家を守る為におるのじゃ。それが、またもや姫様の大切なリカちゃんハウスを壊してしもうた。これは確実に改易、いや、お役御免じゃな。腹を括(くく)り殿様にご報告せねばな。嘆くな。これも武士の定めよ。」

「だ、旦那様ぁ。私が孔雀様に魅入られたばかりにまたもや旦那様にご迷惑・・・おっ？旦那様、こちらを」と何やらご助がＧＩ５の機体を指し示しておりもうす。

「何々・・保障の範囲・・飛行機の墜落とな。では、リカちゃんハウスは？」

「旦那様、お殿様の共済で保障されまする。」

「ご助ぇ！助かったのぉ！」

「旦那様ぁ～」

その時でござります。お屋敷から奥方様がお出でなされまして

「援、いつまで遊んでるの。お風呂入りなさい。」姫様をお呼びなされ、更には

「またこんなに散らかして。」とＧＩ５の機体とリカちゃんハウスの残骸もろともに拙者らを回収箱に入れ、お屋敷へと戻られまして候。

回収箱の中ではご助が

「旦那様ぁ、知らなかったのですか？飛行機の墜落が保障に入ってるってことを？」と言うのに

「し、知っておったわ馬鹿者。」と叱り「それより孔雀様はもう良いのか？」と尋ねるとご助は

「はい。もう結構でござります。あちらを。」と、ご助が指さす方を見やると奥方様のエプロンには孔雀の刺繍が施され、奥方様が歩くたびにヒラヒラとまるで生きている様に見えまして候。

さらには「旦那様。孔雀様は綺麗ですなぁ。今から心を入れ替え、私はこの市民家の安全のため一所懸命勤めさせていただきます。」と強い口調で続け、誓いを立てまして候。
「よし、良いぞご助。それでこそ拙者の中間ぞ。褒美に一両二分は棒引きにしてつかわす。」

「あー、気持ち良いですな旦那様。」主従二人、回収箱の中で寝ころびながら、お屋敷の天井を眺めていると不意に拙者らの目に赤い球状のものが。

それは神棚の中でフワフワと漂う売薬さんのゴム風船。
「ご助！」と制止する間もなく飛び出すご助を追って拙者も回収箱を後にしたのでござる。

それからどうなったかとお尋ねでござるか？

それは、またの機会にお話しいたしましょうぞ。今はとにかく「待ちゃ、ご助。」

でござる。

しからば御免！！　孔雀殿っ！！！（つづく）